人権尊重の精神を基盤に据え ともに生きる豊かな心と たくましく生きる力を持った子どもの育成

宝塚市立良元小学校　学校通信

良 元 通 信

家庭数配布

みんなにとって良いことを みんなが元気になることを　　令和6年（2024）3月25日号

校長 狩野 洋光

修了おめでとうございます

今日は修了式。三学期のがんばり、一年間のがんばりを記した「あゆみ」を各学年にお渡ししました。「あゆみ」は、修了証でもあります。お子さんの一年間のがんばりを大いに認め、褒めてあげてください。子どもたちが毎日を元気に登校できたのは、保護者の皆さんのお陰です。お子さんの様子に心配される日や、親の思いが届かずにもどかしく思う日もあったことでしょう。そんな日にも、見守り、励まし、支えていただき、ありがとうございました。子どもたちは、学校で多くのことを経験しています。とくに人と関わり方については、「ぶつかり稽古」と喩えられるように、実際に関わり、学んでいます。上手くいかない日もあります。しかし、そんな時、寄り添い、見守ってくれる家族の存在、涙や愚痴を受け止めてくれる家族の存在は大きく、子どもにとっての「安心の基地」であったと思います。4月からもどうぞ、元気に子どもたちを学校に送り出してくださいますよう宜しくお願いいたします。

教育から共育へ

今年度は、新型コロナウイルス感染症への不安が残る中でのスタートでした。「三密」「新しい生活様式」から「ウイズコロナ」「アフターコロナ」へ。色々な考え方がある中でしたが、学校では、マスクを外していくところから始めました。次は給食の時間。「黙食」をやめ、机を対面にしての「会食」です。授業では、机をくっつけて、子ども同士が関わりあい、話しあう活動を再開しました。

コロナ禍は、「学校を地域・保護者に開いていこう」「授業を関わりあい、対話を重視した学びにしていこう」という動きにブレーキをかけることになりました。長引く休校、参観日や学校行事への制限もありました。しかし、コロナ禍は、これまでの学校の当たり前を見直すことにもつながりました。行事の精選や行事の在り方につい

て考えるきっかけとなりました。例年通り、前年踏襲による、手段が目的となっていることへの反省、多くの学校で、様々な見直しが図られました。また、宝塚市のGIGAスクールも一気に整備されました。児童用タブレットPCの配布、オンライン授業の開始、これまでの教育活動、教育方法にも大きな変化をもたらしました。

　また、教職員の働き方にも変化が見られます。「学校における働き方改革に関する緊急対策（H29文科省）」では、業務について、（1）基本的には学校以外が担うべき業務　（2）学校の業務だが、必ずしも教師が担う必要のない業務　（3）教師の業務だが、負担軽減が可能な業務　と、3つに分類されました。教職員を取り巻く環境も変わっていく必要に迫られています。昨今の報道にもありますように、先生が足りていません。学習指導、生活指導、個に応じた指導と支援、教材研究、児童理解、等々、たくさんの業務がある中、学級担任への保護者の期待は大きいものがあります。期待がプレッシャーとなり押しつぶされる人もいます。励みとして頑張れる人もいます。学級担任の負担軽減と多様な教職員との関わりを増やすために、学級担任ではなく、チーム担任制を取り入れる学校もあります。これからの持続可能な学校のためにも、教職員の働き方へのご理解と熱い応援を今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

　4月の校長着任より、「教育は一人ではできない」と、職員に話してきました。学校の中で、教職員同士が助け合い、協力する姿を子どもたちに見せていこうと話してきました。「教育は、共育だ」ともいわれます。コミュニティ・スクールも共育のための仕組みだと考えています。子どもが育つ環境づくりのために、学校と地域・保護者が一緒に考えることは、大人自身の学びでもあります。子ども、職員、保護者、地域、それぞれの関わり合いを通して学び、子どもだけでなく、大人も成長していく場が、これからの学校の役割ではないかと思います。

ウェルビーイングの視点で、みんなが幸せに

　二学期には、ウェルビーイングについて紹介しました。人はどんな時に幸せを感じるのでしょうか。またどんな状態を幸せというのでしょうか。コミュニティ・スクールもウェルビーイングのためにあります。良好な人間関係づくりと人同士のつながりが多いほど、人は幸せを感じるそうです。4月からの良元小学校のコミスクをさらに進め、学校が多くのつながりをつくる場となるよう取り組んでまいります。

R6（2024）3月22日 卒業式

卒業式では、「にもかかわらず」と「だからこそ」のお話をしました。

（前半省略）

最後に、中学生となる皆さんに、「にもかかわらず」の生き方と、「だからこそ」の生き方のお話をします。

「アハメドくんの いのちのリレー」という本があります。

アハメドくんは、パレスチナ人、難民キャンプに住む十二歳の少年でした。パレスチナとイスラエルとの間で続く戦闘、繰り返される暴力の連鎖の中、友だちの家に行く途中だったアハメド君は、イスラエルの狙撃兵によって命を奪われました。アハメドくんの心臓をはじめとする臓器は、おもい病気で臓器移植を待つ、イスラエルの子どもたちに移植されました。

子どもをイスラエル兵に撃たれた。にもかかわらす、愛する我が子の臓器を敵であるイスラエルの病気の子どもに与え、イスラエルの子どもの命を救ったパレスチナ人のお父さんがいます。憎しみ、悲しみの中、どれだけ悩み、考えたことでしょう。

この本を書いた、お医者さん作家の鎌田實さんは、こう言います。

「ぼくの父は、貧乏と、妻が重い心臓病という二つの困難をかかえていた。にもかかわらず、捨てられて行き場のなかった僕を拾ってくれた。そして、育ててくれた」

「にもかかわらず」って生き方は、かっこいい
「にもかかわらず」って生き方ができるのが、人間のすごさなんだ。
「にもかかわらず」には力がある。

次に「だからこそ」の生き方についてお話します。
「ひげの校長」という映画が、あります。大正時代に手話を守るために奮闘した高橋潔校長を描いた映画です。主演の「ひげの校長」役を演じた尾中友哉さんは、聴覚に障害をもつ御両親のもとに生まれ、育ちました。
ご自身は耳が聞こえる尾中さんは、こう言います。
「耳の不自由な両親の代わりに、ぼくは小さい時から、両親のために手話通訳をしてきました。もし、両親の耳が不自由でなかったら、今の僕は僕でなかったんだろうなと思います。聴覚障害をもつ両親のもとに生まれたからこそ、今の僕がいます」
尾中さんの「だからこそ」には、自分自身への誇りが感じられました。

「にもかかわらず」「だからこそ」
生き方に意味をつけるのは、自分自身なんだと思います。
（後半省略）

内容は少し変えましたが、修了式でも同じような話をしました。

保護者の皆さん、今年度の本校教育活動へのご理解とご協力に感謝いたします。次年度も引き続き、教職員一同、子どもたちのために励んでまいります。地域・保護者の皆さんと共に考え、取り組んでまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

学校ホームページを更新しています。「学校のようす」をご覧ください